

山口哲堂子全集

第九卷

水原秋桜子
富安風生
山口青邨

大野林火
平畑静塔

監修

明治書院

山口哲子全集

第九卷
隨筆・隨想集

山口誓子全集

三八〇〇円

著者 山口 誓子

昭和五十二年八月二十五日發行

發行者 明治書院 代表 三 樹 彰

印刷者 大日本法令印刷 代表 田 中 忠

發行所 株式會社 明治書院

千代田區神田錦町一―十六八一〇一
電話二九二―三七四一 振替東京三一四九九一

山口誓子 第九卷 随筆・随想集

目次

第一章 おりおりの人 I

回想の秋桜子……………二

遠き日の思ひ出……………二

川田さんのこと……………四

日野草城詩兄……………三

第二章 おりおりの人 II

良寛……………三六

氣といふこと……………三四

子規について……………四〇

愚庵……………四六

鷗外……………六二

槐南の詩……………六六

桃源境……………七一

茂吉の理解……………七五

梶井基次郎に關聯して……………八

青々を偲ぶ……………三

額原先生のこと……………六

三鬼のこと……………三三

山陽のこと……………六六

子規の清貧……………三六

蘇山人……………四二

鷗外の「医者」……………六六

藤村のこと……………五五

賛崎……………七〇

「悲報来」「一本道」……………七三

茂吉の歌一首……………七六

芭蕉と茂吉……………八〇
茂吉と虚子……………八二

芥川龍之介……………八五

第三章 日記抄（アフォリズム）……………八七

日記抄……………八六
死の随筆……………九五

日記抄……………九六

第四章 四季おりおり……………一三七

一步をかけぬ……………一三八
初富士……………一三九

さくら……………一三〇
惜春……………一三〇

新緑……………一三三
水玉模様……………一三三

七月の歳時記……………一三三
虫干追憶……………一三六

雲の峯……………一三六
蟋蟀など……………一四〇

虫……………一四四
草……………一四七

無花果……………一五〇
海辺の雪……………一五三

冬至……………一五七
冬金の魚……………一五六

大寒……………一五九

第五章 「物」……………一六二

雉と鷹……………一六二
横山外科病院で見たもの……………一六三

蕪村の像……………一六五
海浪……………一六七

愚庵の徳利……………一七〇
郭公……………一七六

第六章 「事」

狐火……………	一六	惜しむ……………	一〇
結城つむぎ……………	一八二	嫁さん自動車……………	一八三
眼鏡について……………	一八四	娼家……………	一九
私の本棚……………	一九〇	星……………	一九
二つの星夜……………	一九四	柿の匂……………	一九五
簾椅子……………	一九九	初時雨……………	二〇一
高崎山の猿……………	二〇一	更紗のこと……………	二〇四
伊達黒船……………	二〇五		
安値はフェミニズム……………	二〇八	俳句鑑賞論……………	二〇九
子の名前……………	二一五	校正の話……………	二一六
書名……………	二一九	宰相山雑記……………	二二〇
郷土史……………	二二六	茶道……………	二二六
ボウルセンさん……………	二三九	堀坂山の雪……………	二三一
揮毫……………	二三三	海の女王……………	二三五
女体……………	二三六	自転車相乗禁断のこと……………	二三七
火と闇……………	二三八	火こそ神ながら……………	二四〇
ぶり網……………	二四一	東南アジアの舞踊……………	二四二
高嶺と高嶺……………	二四三	俳句と画・よもやまばなし……………	二四五
ことしの恵方……………	二五〇		

第七章 「処」

阿蘇のこと	三五四	二条城の記	三七七
海辺にて	三六〇	いなびかり	三六三
伊良湖のこと	三六四	方言	三六五
谿間にて	三六七	木曾馬籠	三六九
龍安寺	三七〇	南紀三輪崎	三七二
安乗盛夏	三七三	椎葉印象記	三七五
東海の天	三七七	淀川のこと	三八六
若狭より奈良へ	三七八	季節の窓	三八二
富士山	三八三	道	三八四
小話	三八九	夏の吉野	三九〇
印度のこと	三九二	印度にての連想	三九四
鳴門と伊良湖	三九五	変わらぬ「白き処女地」	三九八
東山三十六峯	三〇〇	喜界島行	三〇二

第八章 良書は常に新刊（書評・作品評）

『秋苑』の一隅に付ちて	三〇六	『波の群』放談	三〇八
新万葉集読後感	三一	『岩礁』を読む	三二四
東西対談	三九	宇野浩二 一途の道	三六
俳句的散歩	三九	序	三四三

第一章

おり
おり
の人

I

回想の秋桜子

「回想記」に於て、「回想されてゐる自分」が、戯画になるか、嚴肅な肖像画になるかは、現に「回想してゐる自分」と「回想されてゐる自分」との関聯如何によつて決まるものである。

「回想されてゐる自分」と、現に「回想してゐる自分」との間に歴史的な、芸術的な発展がない場合には、「回想されてゐる自分」は歴史の道端にぼつくりのこされた黒い石塊のやうに見えるのである。凝つとしてゐる石塊の回想は、まことに哀しい回想である。

それに引きかへて、「回想されてゐる自分」と、現に「回想してゐる自分」との間に歴史的な、芸術的な発展がある場合には、「回想されてゐる自分」は、歴史の道を踏み鳴りしながら、次第にこちらへ近づいて来る列車のやうに見えるのである。接近して来る列車の回想は、まことに愉しい回想である。

「回想記」を書くなら、愉しい回想記を書きたいものだ、私は思つてゐる。哀しい回想記なら、書かない方がいい。

* 自選句集「玄冬」の巻末に掲げた「略年譜」は、謂はは私の交遊録であるが、そのいづれのひとに就いても、夫々多少の回想がある。しかし、ここには、水原秋桜子氏との交遊に

就て書き記して置かうと思ふ。

*

秋桜子氏とはじめて遇つたのは、大正十一年四月のはじめだつた。さういふ日付を実に丹念に、正確に記憶してゐるひとがあるが、私はさういふことが不得手で、まつたくの憶痴である。四月のはじめだと云ひ得るのは、その時私が新しい、頭になじまない角帽をかぶつてゐたといふ感覚的な記憶に拠るのである。その年の春、私は京都の高等学校を出て、東京の大学の入学試験も通つてゐたので、ちかく上京する間際だつたのである。

遇つた場所は昼間の路上であつた。私はたしか五十嵐播水氏と肩を並べて、聖護院御殿の前の、老松の枝に覆はれた道を岡崎の方へ歩いてゐた。

すると向ふから肉づきのいい和服のひとがやつて来るのを見かけた。(和服といふのはすこしあふないが、私の記憶では和服といふことになつてゐる。これが婦人同志でもあらうものなら、その和服の縞柄まで憶えてゐるところだが、男と生れた幸福には、さういふことは憶えてゐなくてもいい)。播水氏はそのひとに面識があると見え、「やあ」と云つて立ちどまり、しばらく話しこんでしまつた。そのひとは「これから弟のところへゆくところなんです」と云つた。播水氏は、手持無沙汰の私を、そのひとに「誓子君はこんど東京の大学へ入りましたから、俳句の方で又何かと御指導を仰ぐことだらうと思ひます」と紹介した。そのひとが水原秋桜子氏

だった。秋桜子氏は、私に「仲間が出来て、心丈夫です。ひとつ御一緒に勉強させよう」と云はれた。

それだけで私と秋桜子氏との初対面は終つた。

いまの話に出て来る「弟」といふひとを、私は京大三高俳句会で知つてゐた。医科の学生で、いつか句会に「金魚」といふ題が出たときに、金魚の死をオフエリヤの死に喩へた句を作つたひとだった。そのひとの兄さんが秋桜子氏だといふことはかねてから聞かされてゐた。秋桜子氏に遇つて見てこの二人は兄弟といふ感じが稀薄なやうに思はれた。

秋桜子氏はこのときの邂逅のことを「山口誓子論」のなかでかう書いてゐる。

「大正十一年の四月、京都に全国医学会の大会がありまして、私も出席したのでありますが、その学会が終つた夜のこと、私の宿を訪ねてくれた五十嵐播水君と、『京鹿子』発行所を訪問しようと思つて出かけました所、丁度向ふから新しい角帽をかぶつて、強い近眼鏡をかけた、いかにも秀才らしい青年が来るのに出会ひました。それが申すまでもなく誓子君で、丁度誓子君は三高を卒業して東京の帝大に入ることになつてゐたので、私の宿をたづねてくれる途中であつたのであります」

度のきつい眼鏡をかけてゐると、すぐ秀才に見たてたりするのは、近眼でないひとの悪癖であるが、近視と勉強との間にも何も関係はないのである。

それはさて置きこの文章を読むと両者の記憶にはかなりの

隔りがあるやうに思はれる。時間なり、場処なりの記憶は私の方が正しいと思ふけれど、播水氏が私と一緒だったのか、秋桜子と一緒だったのかといふことになる、私には強い自信はない。(恰度その頃、私は大丸の写真部で播水氏と思ひ出の写真を撮つたので、どうもその帰途のやうに思はれてならないのである)。

しかし孰れが史実に合してゐるかは、当の播水氏に直接聞いて見るより外に術はない。

尤も秋桜子氏は、いまでこそ「記憶が悪くなつて、他人の作品など仲々いづべんには憶え切れなくなりましてね」と云はれたりするが、記憶のいいのでは誰にもひけをとらなかつたひとだから、播水氏が彼我孰れの同伴者であつたかの記憶は、或は秋桜子氏の方が正しいのかも知れない。

(記憶といへば、秋桜子氏は先輩の諸作品を讀じて實につまびらかだった。さうやつて、先輩の諸作品をいつも脳裡に藏つて置いて、いつもそれ以上に、それ以上に、ところがけられたにちがひない。秋桜子氏のその後の輝しい業績がそれを証拠だててゐる。秋桜子氏は諸先輩から学ぶべきものを学びとつた上、諸先輩を凌駕したのだつた。俳壇には、秋桜子氏のやうに、諸先輩の作品を渉獵するひとはあるが、たいがいはそれに膠着してしまつて一歩も動けないひとが多い。)その日の夜、秋桜子氏の歓迎会が寸紅堂田中王城氏居で開かれ、その翌日は、黒谷の播水氏居で小集が催された。

*

私が上京すると直ぐ、秋桜子氏は、中田みづほ氏の主唱の下に、帝大俳句会を復興し、その頃牛込船河原町にあつた「ホトトギス」発行所で、その第一回例会を催した。八月八日のことである。このときの出席者は虚子先生の外に、富安風生、日影董とみづほ、秋桜子、私を入れて六名であつた。帝大俳句会は第二次といふのか、いまの「草樹会」の前身をなすものである。

*

ラグビーで、タツクルの練習をする革製の人体がある。上からぶらさげて置いて、しかもそれが急速に移動する仕掛けになつてゐる。練習は、急速に移動するその人体をめがけて、砲彈のやうに横とびにとびつき縋りつくのである。時にはとびつき損ねて砂上に転落することもある。

私は、タツクルを練習するやうに、秋桜子氏をめがけて、とびつき縋りついたものである。その当時の句帖を見ると、実に腑抜けた、張りも何にもない句ばかり作つてゐた。さういふ句ばかり作つて、秋桜子氏にぶつかつてゐた。

ぶつかられる秋桜子氏にしても、いまの秋桜子氏の名譽にばは五分五分なのである。その当時の修業はまつたく辛を洗ふやうなものであつた。

秋桜子氏はこのことを

「勿論二人共に俳句の友人がないので、『ホトトギス』発行所の句会にも、国民俳句会にも欠かさず出席し、一週に二回

位は私の家で句会をしていつも夜の十二時位まで研究し合ふのが常でした。然しながら、二人とも進歩は速かでなく格別人の注意を惹くやうな句はなかつたのであります」

二人はまたしばしば吟行に出た。

大正十一年の春だつたやうに思ふのだが、池上かどつかへ行つたことがある。歩いてゐるうちに中食の時間が来て、二人は草の堤に腰を下した。私はどこかで蕎麦でも食、べようと思つて、弁当は持つて来なかつた。秋桜子氏はそれを知ると、自分の持つて来た寿司を風呂敷から出して、私にその半ばを提供された。その当時は、いまとちがつて随分肥満体であつた秋桜子氏のことだから、この食量半減は嚙かし身に応へたにちがひない。

(ことしの春、秋桜子氏が、京都の茶室と夢殿の秘仏を見かたがた西下されたときに、夢殿の案内役は私が引受けた。私は前晚から奈良ホテルに泊つて、その日の午後早々に着く秋桜子氏を待つてゐたが、予定が大幅遅れて、秋桜子氏が自動車で駆けつけられたのは二時過ぎだつた。門限のこともあるで、再びその自動車に乗つて貰つて法隆寺へ向つた。さいはひ夢殿の門限には間があつて、私達はかなりひさしく夢殿の内部にあることが出来た。そして眼のうづくやうな障子の白光が堂の裡にのこつてゐる春の薄暮に、いつまでも、いつまでも秘仏をながめて飽かなかつた。それから中宮寺へ行つて、如意輪観音を拝んだ。そのうちに雨がひどく降り出し、

私達は椅子と卓子の置いてある応接室に雨のあがるのを待つてゐた。雨はなかなか止まなかつた。このしづかな薄暗い尼寺にゐると、樋を流れる雨の音がひっきりなしに聞えた。遠くで雨戸を繰る音も聞えた。障子を開けると、小さい中庭があつて、隠花植物の類が青々とびこつてゐた。向ふには部屋がいくつも、いくつも見え、遠い部屋の庭も見えた。その庭にも雨が降つてゐた。私は渴を医す為に持つて来た蜜柑を出して秋桜子氏にすすめた。秋桜子氏はその蜜柑を実にうまきうに吸ひながら「けふはお昼を抜いてゐるの」と云はれた——私はすぐそのとき、むかし秋桜子氏の寿司を横どりして、饑しい思ひをさしたことを思ひ出してゐたが、それは口に出して云はなかつた。秋桜子氏の好きなもの——寿司、蜜柑）

それから、同じ大正十一年の秋だつたか、隅田川を蒸汽で渡つて、百花園へ行つたことがあつた。私は行くときからすこし風邪気で、それに一日秋風に吹かれたので、再び隅田川を蒸汽で渡りかへして、吾妻橋の繋船場から陸へ上つたときは、咽喉をすつかり腫らしてゐた。秋桜子氏は専門外だが、私の咽喉を覗きこんで「下宿へ帰つたら、近所の薬屋からルゴール氏液を買つて来て、咽喉の腫れたところへつけたまへ。すぐ癒りますよ。割箸の先に脱脂綿をひつつけ、それに液体をしましてつけるんですよ」と云はれた。私は冬になつてルゴール氏液のあの血のやうな毒々しい液体を見るたびに、この日のことを憶ひ出すのである。

そんなことを書きはじめたら際限がない。

*
秋桜子氏は「友」といふ文章のなかで、かういふことを書いてゐられる。

「長い間にただ二人だけ、平気で自分の俳句をその前にさらけ出すことの出来る人が居た。それはSともう一人は今大阪にゐるYとである。けれども此の二人が私に対する態度は必ずしも同じだつたといふわけではない。Yはなかなか私の作に感心せず、どこかに欠点を見出した。私はそれに対してまた当然奮発心を起した。どうしてもいい句を作つてYに見せなければならぬと思ひながら勉強した。Yの句に対する私の批評態度も恐らくさうであつたのだらう。彼も亦作句の上に於て私を圧倒しようと思つて勉強したにちがひないのである。Sと私の関係は全くこれと違つてゐた。Sは十中八九まで私の句を賞めた。一二句は反対するものの、些少でもよい点があれば出来るだけそれと取り上げることを忘れなかつた。私のSに対する態度も恐らくこれに似たものであつたのだらう。私は自分と進む道を同じくするYにはきびしく、異歩道に進むSには寛かであつた。然しこれはただ句の批評の上のことだけで、二人は私にとつて常に忘れ難い友達であつたことは同じである」

Yといふのは私のことである。

いつも、ホトギスの雑詠締切前になると、二人は半紙に毛筆でしたためた雑詠稿を見せ合ひ、お互ひの意見を披瀝しあつた。秋桜子氏は同じ文章で「狷介な性質の私は容易にひ

との批評を聞かなかつた」とも書いてゐられるが、その点になると私は秋桜子氏に劣らなかつた。永い作句生活を想ひかへしてみて、ほんとに自分の句を投げ出して、隅から隅までじろじろと眺められても、ついぞ擦つたいと思はなかつたのは、虚子先生を措いては秋桜子氏だけであつた。

いっぞや私は秋桜子氏の

晩涼や湖舟がよぎる山の影

といふ句を雑誌稿で見、この句の「が」が卑俗な感じを与へていけないと主張した。知識や経験が浅かつたからこそ、そんな無鉄砲なことが臆面もなく云へたものにちがひない。

それを聞いて、秋桜子氏は「とんでもない、僕にはその《が》がとても得意なんだ。これは誰が何と云つても直すわけにはゆかない」と、さもさもわからないことを云ふ誓子だなと云はんばかりの面持をされた。

*

私の東京にゐた期間といふものは、考へて見ると短かいものであつた。

大正十一年は夏の休暇を除くと約六ヶ月、大正十二年は七月に京都へ帰省した儘、関東の大震災の為に、学校は冬になつてからでないと始まらなかつた。それに大正十三年は七月洛北の鞍馬村に引籠つて、高文の受験準備をしてゐるうちに、身体を壊して、芦屋に静養し、その盛肋膜炎を患つたから、翌十四年の十月までは東京にゐなかつた。病氣で卒業が一年遅れ、東京を去つたのが大正十五年四月だから、私の東京に

於ける生活は四年間、正味ざつと二十八ヶ月位しかゐなかつた勘定になる。しかしこの期間は何等かのかたちで絶えず秋桜子氏と行動を共にした期間だつた。酷いときは試験の前夜にも句会を開き、それがすんでから夜を徹して、試験場に臨んだこともあつた。

震災の年の七月、私は京都へ帰省する前に、秋桜子氏のところへ独逸語の書籍を沢山預けて行つた。それはマルクの暴落したときに安く買ひこんだ専門外の書籍で随分重いものばかりだつた。

九月一日、東京に大震災が起り、神田表猿楽町の秋桜子氏の家にも火焰が近づいた。その時秋桜子氏は私の預けた重い風呂敷包を手提げて逃げようとされた。しかし火の勢が意外に強かつたので、途中でそれを手離し、身を以て難を避けられたのであつた。

俳句には直接関係のないことではあるが、ここに明記して置く。

*

芦屋で病臥してゐた大正十四年の一月、秋桜子氏は増田手古奈氏とわざわざ私の病床を見舞つて下さつた。私はそのときのことを句帖にかう書いてゐる。

「いくら思ひなほして見ても、こんなところへ来て坐つてゐる筈のない人達だと思ふと、をかしさとうれしさがごつちやになつて感ぜられた。前夜の寝不足から朝の間をうとうとして、まだ洗面もしてゐない私の顔はこらへきれない笑み

をたたへ、私の声は病氣以来しばらく聞かなかつた高い調子のもものになつてゐたりした。

この人達から聞く旅の話は、何によらず私をよろこばすものばかりだつた。

そんなわけでこの人達が帰つてしまつたあとのさびしさは、何と云つていいか、蓋をした深井のやうなものだつた。晩の食膳に向つたときには、眼に見えて食欲が落ちてゐたし、十二時過ぎても容易にねつかれぬ私だつた。」

*

秋桜子氏の句集に収録されてゐる諸作品を見てみると、私と一緒に作つたものが夥しい数に上つてゐる。それ等は、句会で選句をしながら、ずきんと胸を衝たれた句であるだけに、それ等の作品を見ると、そのときのショックが常に鮮しく甦つて来るのである。

句会では、いつも各人がてんでに自分の作りたい題を出し、自分の出した題だけで句を作つてゐた。だから、二人が同じ題で作つたといふ句は、その割に少く、

海^{うみ}贏^い打^うや灯^{あかり}ともり給^{たま}ふ観^{かん}世^よ音^{おと} 秋桜子

負け海^{うみ}贏^いやたましひ抜けの遠^{とほ}ころげ誓^{ちか}子
がその珍^{めづ}しい例^{れい}だ。その外にも例はないこともないが、私の句がひどく見劣りするのでわざと陳列を控へた。

いつかの句会で

火^かの山^{やま}や真^ま白^{しろ}にかづく昨^{きのう}日^びの雪^{ゆき} 秋桜子

の句を見せられたときには、私も偶然同じ情景を詠んで、

火^か噴^ふく山^{やま}一夜^{いちや}の雪^{ゆき}の白^{しろ}妙^{めう}に

といふ句を出してゐたが、そのときの句帖を見ると、「用語の妙われ遠く及ばず」と嘆息して、この句を句帖から抹殺してゐる。

それにこんなこともあつた。句会で

入^い営^{えい}や大^{だい}阪^{はん}城^{じやう}の大^{だい}手^てより

などといふ句が出ると、秋桜子氏はすぐ

六^む文^{ぶん}錢^{せん}の施^{はた}を押^おし立^たて

などと附けたり、「はた」は「施」と書かなければいけないな、などと云ひながら

又、

寒^{かん}稽^き古^こ諸^{しよ}手^ての竹^{たけ}刀^{やいば}長^{なが}短^{みじ}

などといふ句が出ると、

宮^{みや}本^{ほん}武^ぶ藏^{ざう}ここに候^{こう}ふ

などと茶化したりされた。

たしかその頃、秋桜子氏は、連句の真似ごとのやうなことに癡つてゐられたやうに憶えてゐる。

*

昭和に入つてからは、東西に対峙して、句作に励みあつた。ひとが云ふ「4 S 時代」といふ時代が始まるのだが、ほんとに二人が肩々相摩して揉みあつたのは、大正十五年迄のことである。

*

秋桜子氏が、一時俳句をやめるなどと云ひ出して、私の心

を暗くしたが、昭和六年に「馬酔木」を「ホトトギス」から独立させてしまった。そのときの事情に就て、私は不思議な位何にも知らなかった。秋桜子氏からも詳しい事情は何にも云つて来なかつたし、私からも強ひて聞き出さうとはしなかつた。そのことは今日でも知らないのである。そのことを別に窮めもせずに、昭和十年の春、私は病床から「馬酔木」の陣営に加つた。

*

「回想」といふものには、おほよその距離といふものがある。あんまり近いものはいけない。回想としては、まづこの辺の距離のところで打切るのがいい。

（俳句研究）昭和12年9月

梶井基次郎に關聯して

昭和十二年に出た作品社版の『梶井基次郎小説全集』を買つたとき、私はそれに載つてゐる著者の写真を見て、梶井といふのはこの男か、この男なら、高等学校のとき、しよつちゆう見たことがある、と思つた。同期だが向うは理科甲で、さうしよつちゆう見る訳はないのに、よく和服姿の梶井を見掛けたのは、梶井が寄宿舎にゐたからである。破帽と、脹はつたい臉が梶井にいつも何だか不潔な感じを与へてゐた。しかし、私の記憶にある梶井は、それ以上に發展しない。

作品社版のその全集は大阪で焼けたが、戦後に創元社から

『城のある町にて』（三好達治編）を贈られたので、選抄ながらせてそれ等の作品を身の近くに置き、こころの豊かなるを覺えたのであつた。

就中、私は梶井が湯ヶ島時代に取材した作品を愛読し、梶井の物の看方に教へられるところが多かつた。

物を見るに飽くなき点に於ては負けをとらぬと思つてゐる私も、梶井の眼にはかなはなかつた。俳句の作家は人間生命の根源を探索して、利那利那に永遠を掴まうとする。それで事は終る。しかし小説の作家はそれではすまされない。利那利那が、個で終らず、長い連続として發展しなければならぬ。梶井の湯ヶ島に取材した作品の多くは、たしかに利那利那に永遠を掴み、然もその利那が、個で終らず、長い連続として發展してゐる。そのことは作家の資質にも拠るが、短篇なればこそ見事に達成されたのであらう。長ければその平衡は期し得られない。事実、湯ヶ島作品は多く短篇であり、その後の長い小説では、梶井といへども、利那利那にそれはど骨身を削ることがすくなくなり、世の常の小説の在り方に近づいてゐる。

梶井の湯ヶ島作品だけに着目することは偏頗であるけれども、私は俳句の作家として物の看方に教へられるところが多い故に、それ等一群の作品を頗る珍重し、又他の俳句の作家にもそれ等を読むことをすすめてやまないのである。

こんど高桐書院から出た『梶井基次郎全集』も私は買った。遑を得ずしてまだ再読してはゐないが、年譜と日記だけは読

んだ。

大正八年、梶井が第三高等学校理科甲類に入学して、寄宿舎の北舎第五室に入ったとき、同室には中谷孝雄・飯島正がゐた。

病を養ひ文学に親しむで学業は遅れた。大正十二年中谷孝雄・外村茂・小林馨等と三高劇研究会を組織した。

大正十三年、東大文学部英文科に進んだ。

三高劇研究会のメムバーを以て「青空」を発刊したのはその翌年、大正十四年の一月であつた。この同人雑誌は昭和二年の中頃までつゞいた。梶井が後に「青空」の思ひ出を書いた文章がある。

「当時同人雑誌はまだ実に少ないものであつた。大学では小方又星・伊吹武彦・浅野晃・飯島正・大宅壮一、それに一高の連中がやつてゐた『新思潮』が漸く出はじめた頃で、慶応からは『青銅時代』『葡萄園』——『辻馬車』や早稲田の『主潮』などは私の記憶に間違ひがなければ、『青空』よりも遅れてゐた」

「青空」の同人は、はじめ、梶井の他に中谷孝雄・外村茂・小林馨・忽那吉之助、それに早稲田から稲森宗太郎が参加し、その後、淀野隆三・浅沼喜実・北神正、ついで飯島正・三好達治・北川冬彦が加はり、龍村謙が加はりなどしたのである。梶井が挙げた人々の名を三高卒業の年度に従つて見、私に何か文学的な思ひ出あらば、それを記して見よう。

梶井が、その当時の「新思潮」同人として挙げてゐる小方

又星・伊吹武彦・浅野晃・飯島正・大宅壮一はいづれも大正十一年の卒業であるが、その中、大宅は私と同じ文科乙類（独）、他はすべて文科丙類（仏）である。

小方又星は、本名庸正。小方の処女作詩集には藤村が序文を書いてゐる。その中で小方は、自らの内に先人を発見することの悦びを云ひ、藤村は自らの内に新人を発見することの悦びを云つてゐる。

大学を出て大阪高等学校で仏蘭西語を教へてゐたが、早く世を去つた。ギユイヨの『社会学上より見たる芸術』の翻訳が岩波文庫にある。小方の遺著を私はそれ以外に知らない。同じ級に田畔忠彦がゐた。田畔が詩人の北川冬彦で、後に「青空」の同人になる。

梶井は何も触れてゐないけれども、翌大正十二年の文科丙類には河盛好藏・杉捷夫・前川堅市・水野亮がゐる。

私が高等学校の二年の頃だつたか、小方・河盛・前川などの詩のグループに私も加はつて、その回覧雑誌に詩稿を寄せたことがある。ノートをちぎつて書いた私の詩の一つには、青年が Spina を顕微鏡で覗いてゐるところが詠つてあつた。尋常ではいけない、露善ではいけないと思ひ、ことさらに異常を求め、露悪を求めた詩であつた。青年に通ずる弊とはいへ、私はその時代の私自らを嫌悪せずにはゐられない。

私は既に俳句に手を染めてゐた。その証拠に詩の方は贅児といふ名を使つたからである。しかし詩は永続しなかつた。河盛はたしか燦光といふ号を使つてゐたやうに思ふ。お互